

## 当事者へのヒアリング結果報告書

### 1 ヒアリングの概要

#### (1) 目的

当事者（過去に犯罪をし立ち直った者（立ち直ろうとしている者））に対してヒアリングを行い、その結果を神奈川県再犯防止推進計画に反映し、当事者の目線に立った再犯防止施策を進めることを目的とする。

#### (2) 対象

過去に犯罪（薬物使用等）をし、現在は立ち直りの支援に携わる者 6 名（自  
助グループ員 5 名、協力雇用主 1 名）

#### (3) 実施期間

令和 5 年 6 月 28 日～令和 5 年 7 月 20 日

#### (4) 方法

横浜保護観察所の会議室にて、個別に対面により実施

#### (5) ヒアリング内容

できる限り対象者の話の流れを尊重しつつ、主に次の 4 つの項目についてヒアリングを実施。

- ① 薬物等を使用したきっかけ
- ② 立ち直りの要因
- ③ 社会復帰した際に感じた不安と解消方法
- ④ 必要だと感じる支援

### 2 ヒアリング結果

#### ① 薬物等を使用したきっかけ

- ・ 海外の学校に通っていたときに流行っていた。使用すると安心感や勇気、集中力が得られた。帰国しレベルの高い大学に入ったことによるプレッシャーから、再び薬物を摂取し安心を求めるようになった。
- ・ 親の「強い子に育てたい」という意向で厳しくしつけられたが、自分はストレス耐性が弱く、緊張感の強い子だったと思う。小学校高学年のとき、接着剤に含まれるシンナーのにおいて緊張感が薄らいだ経験から習慣的  
なり、大学生の時、海外に旅行したとき、大麻を吸うようになった。

- ・ 親がアルコール依存症で自分以外の家族に暴力を振るっていた。次第に、言いたいことも言えず大人の顔色ばかり見るような子どもになった。中学で同じ境遇の不良仲間に出会い、シンナーを使用。シンナーを使うと嫌なことを忘れられた。その後は、覚せい剤とアルコールに依存した。
- ・ 中学生のとき、同級生に誘われて薬物を使用した。最初は一回くらいだったらしいと思ったが、次第に使用頻度も増えていった。家族仲は、いいとは言えないがそこまでひどいわけでもなかったが、思春期だったので、親や周囲に相談をするという考えが無かった。

## ② 立ち直りの要因

- ・ 自助グループに入所して薬から距離を置き、ミーティングに参加する等、人とかかわりを持つことで次第に「自分さえよければいい」という考えを改めようと感じるようになった。
- ・ 拘置所の中で、何歳までに何をするか目標を決めた。出所後は仕事を始め、ジムに毎日通うようになり、仕事とジムの仲間が自分の居場所だった。 そういった居場所があったことは今思えば大切なことだったように思う。
- ・ 自助グループのプログラムに参加して、自分の気持ちを話すうちに、イライラした気持ちが浄化されてゆき、「なんとかしなきゃいけない」、「やめたい」と思うようになった。
- ・ アルコール依存になってから、自力ではやめられなかったが、自分が今まで人を当てにして生きてきたことに気づき、このままではダメだと考えるようになった。自助グループに通い、自分のことを受け入れてくれる仲間と出会い、自分ときちんと向き合った結果、過去の惨めな経験をもう自分にはさせないと決心できた。
- ・ 出会いが大切。 自助グループへ参加し始めた頃、とあるミーティングの司会者が自分と似た境遇で、これまでの経歴を隠さず話すことができた。その司会者の紹介を通じて、人脈が広がっていった。
- ・ 自助グループ入所中に、他の入所者の話に共感することができた。そこから分かち合うという感覚を理解できるようになった。また、自分の役割を与えられ、入所者や職員から感謝の言葉をかけてもらうことでやりがいや嬉しい気持ちを感じた。それが薬をやめ続ける理由になった。

### ③ 社会復帰した際に感じた不安と解消方法

- ずっと刑務所の中に入っていたことで、最近の社会事情も分からず置いて行かれているという感覚があった。その不安から、出所後すぐに社会復帰ができなかった。そんなとき、親身に接してくれた保護司に救われた。その人柄の良さや親しみやすさから、保護司には、家族に関する悩み等も本音で相談することができた。
- 刑務所出所時の年齢が高齢だったため、就職のこと等これからどうやって生活を確立させていけばよいのか不安であった。自助グループで後悔の気持ちも含めて自分の思いを話すということを積み重ねていくうちに、次第に自己肯定感が上がっていった。
- 家族に薬をやっていることがばれてしまうことに対して不安を感じていた。
- 入所したときから出所後の全てのことが心配であった。

### ④ 必要だと感じる支援

- 依存症は、幼少期の生きづらさが関係しているように思うので、大人を頼らず自己解決を強いられている子どもを救う環境を整備していくことが大事である。安心できる人間関係と居場所があれば薬に手は出さないで、問題の根幹から変えていく必要がある。
- 依存症で悩んでいる人に対して、支援機関（自助グループや依存症回復プログラムを実施している病院、相談機関等）の情報提供をしてほしい。そこに行けば「あなたと同じことで悩んでいて、あなたの気持ちがわかる人がいる」ということを伝えてほしい。支援につなぐことが、依存症で悩む人の居場所づくりにつながる。
- 依存症に対する市民の理解が欲しい。物件を探していたとき、不動産屋に心無い言葉を浴びせられたことがある。また、自助グループの開設にあたっては、近隣住民から抗議を受け、説明会を開く等したが、結局理解が得られなかった。このような偏見をなくすには、「依存症は回復する病であること」や「誰でもなり得る病であること」を知ってもらう必要がある。
- 薬物等依存と同時に、ジェンダーにとらわれた生活を強いられたり、LGBTQであることによる生きづらさを感じている人がいる、ということを理解してもらいたい。

- ・ 知的障がい、精神障がい等コミュニティに入ることが困難な方への支援をしてほしい。
- ・ 行政は部署が縦割りであるため、申請などの手続に時間がかかるため、認定や証明の発行はもっとスピード感を持ってほしい。
- ・ 出所後の生活支援。就労支援では、いきなりフルタイムで勤務するのが難しい方のために、任期が決まっている等短期間の雇用枠があるといい。また、住居の確保支援については、現住所が自助グループだとわかると保証会社の審査が通らず苦慮している。

### 3 必要な支援等について

ヒアリングを通して、立ち直りには、まずは本人が薬物等の使用をやめる決意をすることが大切であり、その決意をした人が拠り所にできる環境が重要であることがわかった。

今後の計画の改定にあたっては、ヒアリング結果をふまえ、次の点について検討していく。

- 保護司の確保及び活動への支援
- 当事者団体への支援
- 依存症者への支援機関の情報提供および依存症についての啓発
- 障がいをもつ依存症者への支援
- 住居の確保支援
- 就労支援
- 幼少期の生きづらさを軽減するための支援